

## 日本の“デザイン都市”のこれからを考えるカンファレンス Vol. 3

### 「往来 | Correspondence」 実施報告書

催 事 名	日本の“デザイン都市”のこれからを考えるカンファレンス vol.3 「往来   Correspondence」
開催日時	2025 年 9 月 3 日（水）18:30-20:30
会 場	デザイン・クリエイティブセンター神戸（KIITO）ギャラリーC （神戸市中央区小野浜町 1-4）
プログラム	第 1 部：クリエイティブ・トーク「100 年後を夢見るための地域デザイン」 林千晶（株式会社 Q0 代表取締役社長） 第 2 部：クロストーク モデレーター：林千晶（株式会社 Q0 代表取締役社長） ゲスト： 佐藤公哉（WATARAI DESIGN PARTNERS、クリエイティブディレクター／デザイナー）旭川市 野口僚（合同会社 六甲山クリエイティブラボ、木材活用コーディネーター）神戸市 浅野翔（デザインリサーチャー）名古屋市
参 加 費	無料
参加者数	51 名（運営関係者、ゲスト計 18 名は含まず）
主 催	ユネスコ・デザイン都市推進委員会（あさひかわ創造都市推進協議会、神戸市、 ユネスコ・デザイン都市なごや推進事業実行委員会）
後 援	創造都市ネットワーク日本（CCNJ） 公益財団法人日本デザイン振興会（JDP）

ユネスコ創造都市ネットワーク（UCCN）のデザイン都市に認定されている旭川市・神戸市・名古屋市は、2023 年に「ユネスコ・デザイン都市推進委員会」を設立し、国内における交流と連携の強化を進めている。その取り組みの一環として始まったカンファレンス「往来 | Correspondence」を、東京（2023 年）、名古屋（2024 年）に続き、第 3 回目を神戸市で開催した。

本カンファレンスは、各都市の活動紹介や意見交換の場であると同時に、創造都市の連携を継続的に育み、互いの知見や経験を共有することによって新たな価値を生み出すための基盤として位置づけられている。今回は、株式会社 Q0 代表の林千晶氏によるクリエイティブトーク（基調講演）と、3 都市からのゲストによるクロストークを通じて、デザイン都市の役割と未来像を多角的に探った。

## 第1部 クリエイティブ・トーク「100年後を夢見るための地域デザイン」

林 千晶（株式会社 Q0 代表取締役社長）



人口減少や都市間競争の前提が変わるなかで、「なぜ人はこの都市を訪れ、暮らしたいと思うのか」を再定義する時代に入った――林氏は、創造都市の役割を“狭義のデザイン”から“社会全体を編み直す広義のデザイン”へと拡張して考える必要性を示した。山梨県のデザインディレクターとしての実践を挙げつつ、地場産業の活性化、暮らしの質（QOL）の向上、社会価値の創出は各都市に共通するゴールだと位置づける。さらに「地域を動かすには、デザインだけではなく、そこに関わる人の存在が不可欠である」と強調、地域を動かす3つの視点が提示された。

### 家族のように集い続けるコミュニティ

自身が立ち上げに関わった「[代官山ロータリークラブ](#)」のエピソードを交えながら、ロータリークラブの原則（社会貢献／定期的な集い）に学び、相互の違いを抱えたまま“会い続ける”設計が創造の基礎体力を生むと説いた。

秋田県で毎月開催する「[ソウゾウの森会議](#)」では、県北から県南までキャラバン形式でテーマ（畜産／水／木材など）を設定し、外部ゲストと地域人材を接続。10年で起業家精神をもつ100人を育むことを掲げ、民間主導の拠点整備にも踏み出しているという。

## 大勢の賛同より、ひとりの熱烈な支援者

ロフトワーク創業当時、多くの投資家からは理解が得られなかったが、伊藤穰一氏（起業家／教育者、MITメディアラボ元所長）による支援が事業を前進させる契機となった。この経験は、現在林氏が渋谷で運営に携わる「[100BANCH](#)」の仕組みにも反映されている。そこでは25名のメンターが“全会一致”ではなく「ひとりの強い押し」で採択できる制度を導入しており、少数意見から芽吹いた挑戦がやがて社会を動かすプロジェクトへと育つ。例えばヘラルボニーはその典型であり、ひとりの支援が未来を切り拓く力になることを示している。

## 多様な見方を認め、技術と結ぶ

「[飛驒の森でクマは踊る（ヒダクマ）](#)」では、曲がり木や端材を3Dスキャン等のエンジニアリングと掛け合わせて価値化し、店舗什器やインスタレーション、木のクレヨンなどへ展開。“100%木を使う”方針のもとで活用の幅を拡張し、近年は安定的な黒字化も達成したという。秋田では超軽量の木製椅子づくりに取り組み、デザインと工学の協働で国際市場（ヘルシンキデザインウィーク）への展開を視野に入れる。



Live Qで集められた「楽しさをシェアする時に意識していることは？」という質問に対しては、まず自分に「なぜ／いつ／どこが楽しいのか」を問い直すことが肝要で、SNSカリエルかは手段に過ぎないと回答。また、「応援者に出会うまでが大変なのではないか？」という質問には、実は出会い自体は起きており、面白いと言ってくれた人との関係を“離さない”姿勢が重要だと述べた。肩書や条件よりも当事者性を重んじる態度が、次の協働を呼び込むという。

林氏は最後に、「私たち自身が楽しむことから始めよう」と呼びかけた。創造都市は“説明”より“実験と提案”で体感に変えるべきであり、旭川市・神戸市・名古屋市それぞれが自らの“歯車”を回し、噛み合わせていくことで大きなムーブメントになる——トークは、参加そのものが社会貢献であり、会い続けるための仕組み（デザイン）が未来を拓く、というメッセージで結ばれた。



## 第2部 クロストーク

第2部では、旭川市・神戸市・名古屋市からのゲスト・クリエイター3名が、それぞれの地域での活動やプロジェクトを紹介した。

### 佐藤公哉（WATARAI DESIGN PARTNERS、クリエイティブディレクター／デザイナー）旭川市



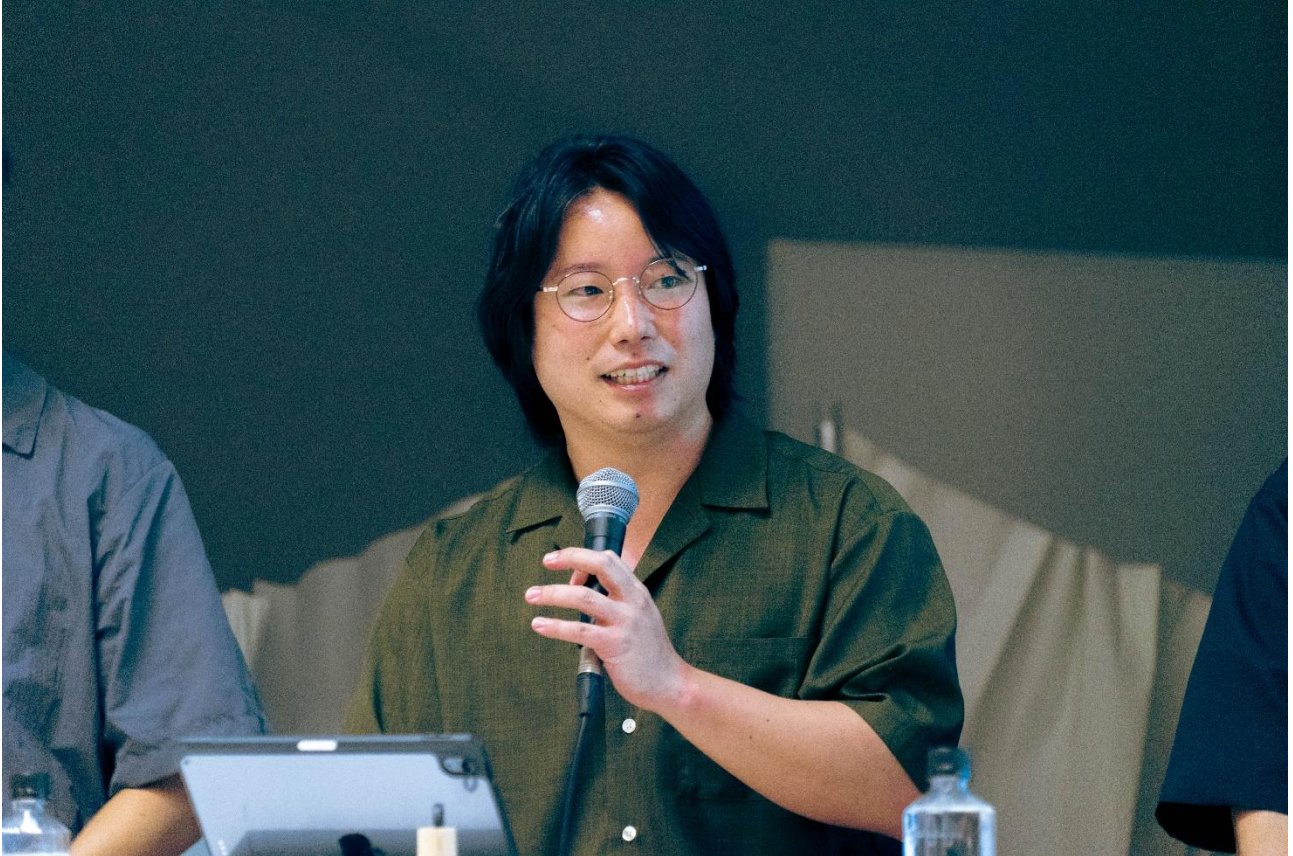
旭川市からは、クリエイティブディレクターであり、旭川デザインプロデューサーも務める佐藤公哉氏が登壇した。北海道第二の都市・旭川市は、人口約 32 万人を有し、自然と都市機能が近接する特徴をもつ。中心部には駅や市役所があり、わずか数分でスキー場にアクセスできるなど、豊かな自然環境が生活に溶け込んでいる。旭山動物園や旭川家具、ラーメンといった名物に加え、冬季には樹氷が見られる厳しい自然も魅力のひとつである。

近年は「[旭川デザインプロデューサー](#)」という育成事業を通じ、地域の魅力をデザインにつなげ、持続可能な成長を支援する取り組みを進めている。現在 27 名が活動しており、イラストレーターや建築家、職人など多様な人材がコミュニティを形成し、地域課題の解決に取り組んでいる。佐藤氏自身もフリーランスのデザイナーとして活動し、地域製品のラベルデザインやブランディングを高校生と協働で行うなど、若い世代を巻き込んだ実践を展開している。

また、大阪・関西万博においては、市の家具産業と連携し、副産物の木の端材を活用した「バードコール」を制作。地域資源を新たな価値に転換するチャレンジを紹介した。こうした活動を通じて、民間・行政・外

部人材が一体となり、地域ににぎわいを生み出すことを目指している点が、旭川市の大きな特徴である。

#### 野口僚（合同会社 六甲山クリエイティブラボ、木材活用コーディネーター）神戸市



神戸市からは、六甲山に拠点を構える「六甲山クリエイティブラボ」を運営する野口僚氏が登壇した。2025 年 1 月に開設された同ラボは、地域の木材資源を活用しながら、シェア工房として若手クリエイターや地域住民に開かれたものづくりの場を提供している。家具や小物の製作を通じて神戸産材の魅力を発信するほか、木育や体験型教育の拠点としても機能している。

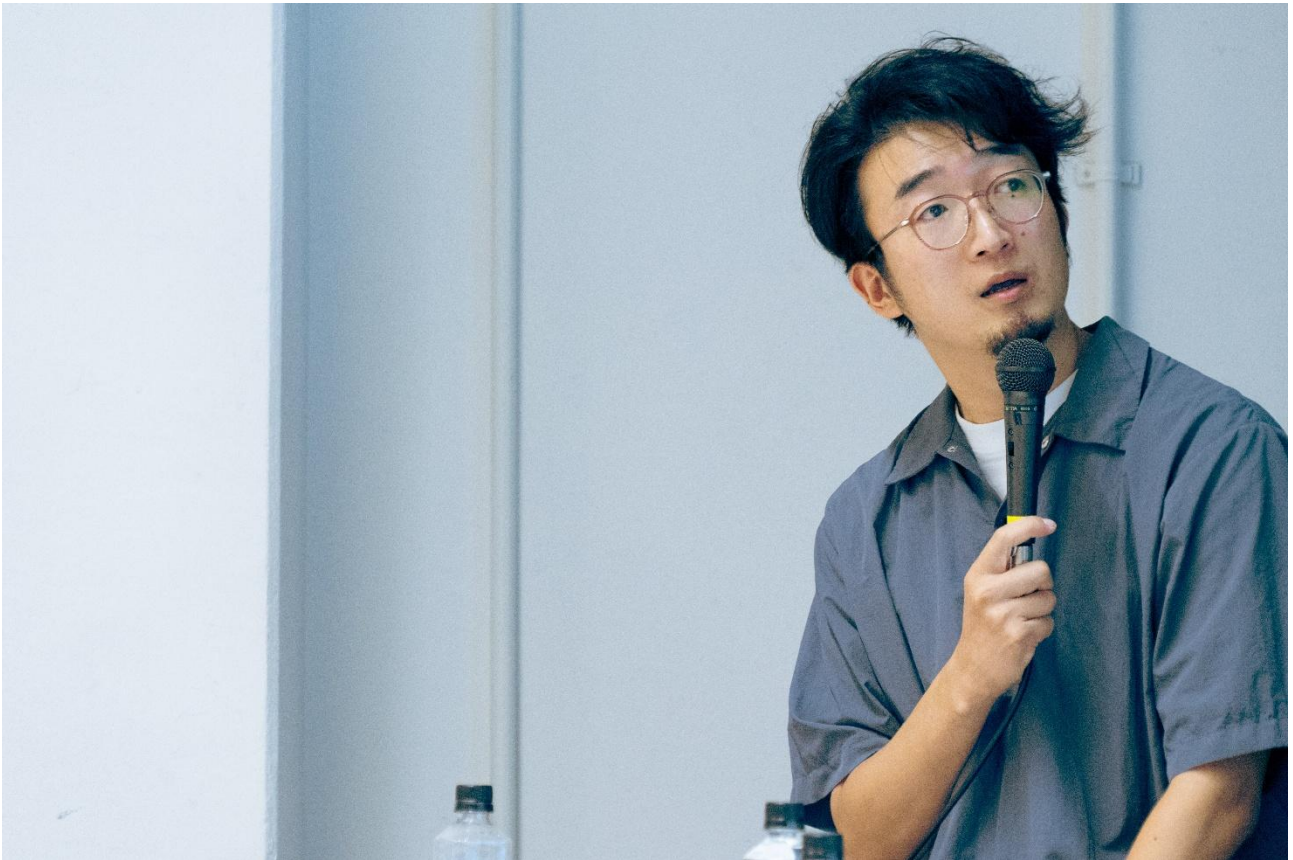
工房では、若手クリエイターが試作品を制作し、国内外で発表する機会を得ており、特に神戸芸術工科大学出身のデザイナーが国際的な舞台で活躍する事例が紹介された。従来は東京や大阪に活動拠点を移す若手が多かったが、地域に受け皿があることで、地元で挑戦する環境が整いつつあるという。

さらに、地域の木工所として廃材や地元材を用いた家具製作や、依頼に応じたデザイン・製作にも取り組んでいる。住民やシニア世代が集い、趣味として木工を楽しむ場としても開かれており、森と人、都市をつなぐ場としての役割を果たしている。

加えて、「[森の未来都市 神戸](#)」構想や、市と民間が連携した林業資源の活用プロジェクトにも触れ、地域資源とデザインを結びつけることの重要性を強調した。野口氏は「まちと人と森をつなぐ拠点」として、今後も神戸ならではの活動を広げていきたいと語った。



## 浅野翔（デザインリサーチャー）名古屋市



名古屋市からは、デザインリサーチャーの浅野翔氏が、有松地区での取り組みを紹介した。有松は有松絞りで知られる地域であり、江戸時代以来、繊維を仕入れて加工し販売する「二次加工産地」として発展してきた。かつては広域な経済圏を形成していたが、近年は産業規模が縮小し、職人の数も減少の傾向にあるという。

こうした中、浅野氏は「[合同会社ありまつ中心家守会社](#)」を元名古屋市職員と絞り産業に従事する3代目と立ち上げ、遊休資源を活用した新しいコミュニティ拠点づくりを進めている。補助金を活用して改修された拠点「[moss ARIMATSU](#)」は、レンタルキッチンやスペース、コミュニティガーデンを備え、1年半で250件近い利用があり、多様なイベントが実施された。特に「2050年の未来」をテーマに地域住民をはじめとした参加者らと議論し、未来から逆算して空き家の活用を生み出す試みが印象的であった。

また、伝統産業を単に保存するのではなく、新しい技術や価値観との出会いを生む場とすることを重視している。発酵文化を生かした味噌づくりから未来のデザイン活動を考える試みなど、地域資源と未来志向を結ぶ取り組みが展開されている。浅野氏は「有松をフィールドに、解決策の見えない課題に向き合う実験を重ねることが、結果的に産業や地域活性化につながる」と語り、その視点は参加者に強い共感を呼んだ。

続いて、クリエイティブ・トークに登壇した林千晶氏がモデレーターを務め、各都市の取り組みをさらに掘

り下げるクロストークが行われた。



はじめに、Live Q に上がった質問「デザインの力を活用して街全体が活性化していると感じる国内の都市、あるいは街はあるか？」と共通の問いが投げかけられた。

旭川市の佐藤氏は、5月に神戸市内を歩いた体験を紹介し、ファーマーズマーケットやイベント、音楽、スポーツなど多様な活動が日常的に展開されている神戸の街に強い印象を受けたと語った。一日を通じて複数のレイヤーの催しに出会えることが街の魅力につながっていると述べた。

名古屋市の浅野氏は「デザインだけで街が活性化することはない」と強調した。街を動かすのは人の思いや活動であり、デザインはその支援や先進的な試みを後押しする存在であると位置づけた。デザインの力はイメージを喚起する触媒であるとしつつも、「表層的なデザインをすれば街が変わる」という短絡的な考え方には懐疑的であると述べた。

神戸市の野口氏は「デザイン」という言葉自体が広義すぎるため、あえて使わないことが多いと述べた。作る、流通させる、チームを組むといった具体的な行為にこそ意味があり、デザインの力を論じるにはその言葉の中身を具体化する必要があると指摘した。

これを受けて林氏は「長い時間をかけて蓄積された文化が息づく街には特別な魅力がある」と述べ、神戸や松本で感じた「文化の厚み」が人を惹きつける要素であると振り返った。会場からも共感のうなずきが広がり、デザインと人・文化の関係性を再確認する機会となった。

クロストークの後半では、林千晶氏がモデレーターとなり、各ゲストに個別の質問を投げかけながら議論を深めた。

まず旭川市の佐藤氏には「企業での勤務と、独立して地域で活動することの違い」について問いかけられた。佐藤氏は、広告関連の企業に勤めていた経験から、成果が印刷物に限定されることに物足りなさを感じ、地元を盛り上げるために独立を選んだ経緯を語った。安定を捨てて挑戦する姿勢は、若い世代への刺激となるものであり、林氏も「自治体は佐藤氏のような人材を支え、増やしていくことが重要だ」と力を込めた。

続いて神戸市の野口氏には、若手ユニット「Kt & Fs」への支援の根本的な動機について質問が投げかけられた。野口氏は「人がものを作る姿を見るのが好きで、表現よりも誰かの欲しいものを一緒にかたちすることに喜びを感じる」と語った。地域材との出会いをきっかけに多様な木材の可能性を広める活動にもつながっており、その姿勢に林氏は共感を示した。

最後に名古屋市の浅野氏には、有松で改修したレンタルスペースの事業費用についての率直な質問が投げかけられた。浅野氏は総工費が約 4,500 万円で、その多くを補助金で賄ったことを明かした。また「誰が使うのか」という問いに縛られすぎると本来の目的を見失うと指摘し、地域の未来に必要な場を自らつくり出すことが重要だと述べた。

林氏は総括として、人口減少社会においては「新しい事業やインフラを自ら創り出す力」が不可欠であり、3 人のような挑戦が地域の未来を切り拓くと述べた。会場からは大きな拍手が送られ、クロストーク全体を通じて「デザイン」と「人」の力の相互作用が改めて浮き彫りとなった。

最後に、ユネスコ・デザイン都市推進委員会の江坂より「本日の議論を通じて、デザイン都市の多様な取り組みが改めて確認できた」と述べ、ゲストや参加者への感謝を伝えた。さらに、「往来 | Correspondence」は来年、旭川市での開催を予定していることを発表し、継続的な交流と議論の場としての意義を強調した。会場は次回開催への期待を込めた拍手で締めくくられ、熱気を残したまま閉会となった。

## 結びにかえて

クリエイティブトーク（基調講演）において林千晶氏は、「地域を動かすには、デザインだけではなく、そこに関わる人の存在が不可欠である」と強調した。デザインはあくまで手段であり、それを地域に根づかせ、成果へとつなげるには、人が共感し、面白さを感じ、関わり続けることが不可欠である。林氏自身が取り組む秋田県や山梨県での事例も、この視点を裏づけるものであった。

また、「関わり続けること」「継続して会い続けること」の重要性は、本カンファレンスのタイトルである「往来 | Correspondence」とも深く響き合う。都市と都市、人と人が行き来し、対話を重ねること自体が新たな創造の基盤となる。今回の議論は、その意義を改めて確認する機会となった。

旭川市、神戸市、名古屋市には、今後も市民や地域の担い手、クリエイターらが主体的に活動を広げ、互いにつなげていくための役割が求められる。それは、アンバサダーとして外に向けて都市の魅力を伝える役割であると同時に、コーディネーターとして他都市や優れた取り組みを地域社会に結び付ける役割でもある。

ユネスコ・デザイン都市推進委員会は、デザイン都市間の交流と連携のプラットフォームとしての役割を担い、今後も積極的な協働を継続し、新たな可能性を切り拓いていく決意である。



## ゲストプロフィール

### 林 千晶 | 株式会社 Q0 代表取締役社長



早稲田大学商学部、ボストン大学大学院ジャーナリズム学科卒。花王を経て、2000 年に株式会社ロフトワークを起業、2022 年まで代表取締役・会長を務める。退任後、「地方と都市の新たな関係性をつくる」ことを目的とし、2022 年 9 月 9 日に株式会社 Q0 を設立。北海道や秋田などの地域を拠点において、地元企業や創造的なリーダーとのコラボレーションやプロジェクトを企画・実装し、時代を代表するような「継承される地域」のデザインの創造を目指す。主な経歴に、グッドデザイン賞審査委員、経済産業省 産業構造審議会、「産業競争力とデザインを考える研究会」など。森林再生とものづくりを通じて地域産業創出を目指す、株式会社飛驒の森でクマは踊る（通称：ヒダクマ）取締役会長も務める。

### 佐藤 公哉 | WATARAI DESIGN PARTNERS、クリエイティブディレクター／デザイナー



1983 年、北海道旭川市生まれ。グラフィックデザイン、Web、映像、写真、印刷など幅広い専門技術を活かし、地域に寄り添うデザイナーとして活動している。ブランディングとマーケティングの両面から、暮らしを豊かにするクリエイティブを提案。デザイナーの視点で課題を見つけ、前向きなアイデアと行動力で形にしている。人との繋がりを何よりも大切に考え、会話や出会いから生まれるひらめきを楽しみながら、丁寧なモノ・コトのデザインを続ける。地元・旭川を拠点に、地域資源を活かしたプロジェクトやまちの魅力を伝える活動にも、積極的に取り組む。

### 野口 僚 | 合同会社 六甲山クリエイティブラボ、木材活用コーディネーター



神戸芸術工科大学卒業後、家具メーカーで木製家具製造、DIY 専門店での店長・講師を経験。同大学助手として学生の作品制作を支援。2023 年大学院で地域発生木材の利用促進を研究。2025 年、六甲山にシェア工房「六甲山クリエイティブラボ」を設立し、地域資源を活用した制作と若手クリエイター支援に注力。地域と人をつなぐモノづくりを目指す。

### 浅野 翔 | デザインリサーチャー



1987 年兵庫県生まれ、名古屋育ち。2014 年京都工芸繊維大学大学院デザイン経営工学専攻修了。同年から、名古屋を拠点にデザインリサーチャーとして活動を始める。

「デザインリサーチによる社会包摂の実現」を理念に掲げ、調査設計、ブランド・商品開発、経営戦略の立案まで、幅広いジャンルで一貫したデザイン活動をおこなっている。

「未知の課題と可能性を拓く、デザインリサーチ手法」を掲げ、文脈の理解〈コンテキスト〉と物語の構築〈ヴィジョン〉を通じた、一貫性のある提案をおこなう。2018 年より合同会社ありまつ中心家守会社共同代表。2024 年より国際芸術祭「あいち 2025」ラーニング・コーディネーターを務める。

## 広報ツール

フライヤー（105mm×105mm） 400 枚制作、主催各市、及び関係機関にて配布・配架



日本の“デザイン都市”のこれからを考えるカンファレンス Vol.3 **往來 | Correspondence**



2025.9.3 wed. 18:30-20:30 会場: デザイン・クリエイティブセンター神戸 (KIITO)

**第1部 クリエイティブ・トーク CREATIVE TALK**  
「100年後を夢見るための地域デザイン」 林 千晶 (株式会社 QO 代表取締役社長)

**第2部 クロストーク CROSS TALK**  
佐藤公哉 (WATARAI DESIGN PARTNERS、クリエイティブディレクター/デザイナー) 旭川市  
野口 徹 (合同会社 六甲山クリエイティブラボ、木材活用コーディネーター) 神戸市  
浅野 翔 (デザインリサーチャー、サービスデザイナー) 名古屋市  
モデレーター: 林 千晶 (株式会社 QO 代表取締役社長)

  
林 千晶

  
佐藤公哉

  
野口 徹

  
浅野 翔

## WEB サイト（公式）

<https://www.creative-nagoya.jp/ourai2025/index.html>

## その他の掲載

designcities.net（ユネスコ創造都市ネットワーク・デザイン分野加盟都市の活動を発信するプラットフォーム）

<https://www.designcities.net/conference/conference-for-thinking-about-the-future-of-japans-design-cities/>